

# 大野川中流域における旧石器時代 研究の基礎調査(2) 一製紙工場前遺跡一

橘 昌 信

## 1 はじめに

大野川中流域は東九州における旧石器時代研究の中心的存在とみなされ、実際大野町をはじめとする周辺地域で数多くの資料が採集されており、また発掘調査も進められ、多くの成果を上げつつある。大野川中流域はこれまでに発見された旧石器時代の遺跡・資料の数的な豊富さもさることながら、この地域におけるテラフの良好な堆積は、他地域との層位的な関連も含めて、今後旧石器時代研究に多大な成果をもたらすものとして注目されている。

大野町の製紙工場前遺跡および隣接する大野高校遺跡では各種のナイフ形石器や剝片尖頭器と考えられる石器、それに縦長剝片などが相当数出土しており、大半の資料については、既に紹介されている。何分とも採集資料であるためその伴関係については全く不明であり、また出土の地層も明らかにされていない。そこで製紙工場前遺跡については大野川中流域の遺跡の分布状況の把握、さらに採集資料の分析、出土層位の確認などを目的とした基礎調査の一環として、昭和51年1月から2月にかけて基礎調査を実施したのである。

## 2 遺跡の立地と環境

祖母・傾山系、阿蘇外輪山それぞれに源を発する県下最大の河川である大野川は阿蘇山の東側に

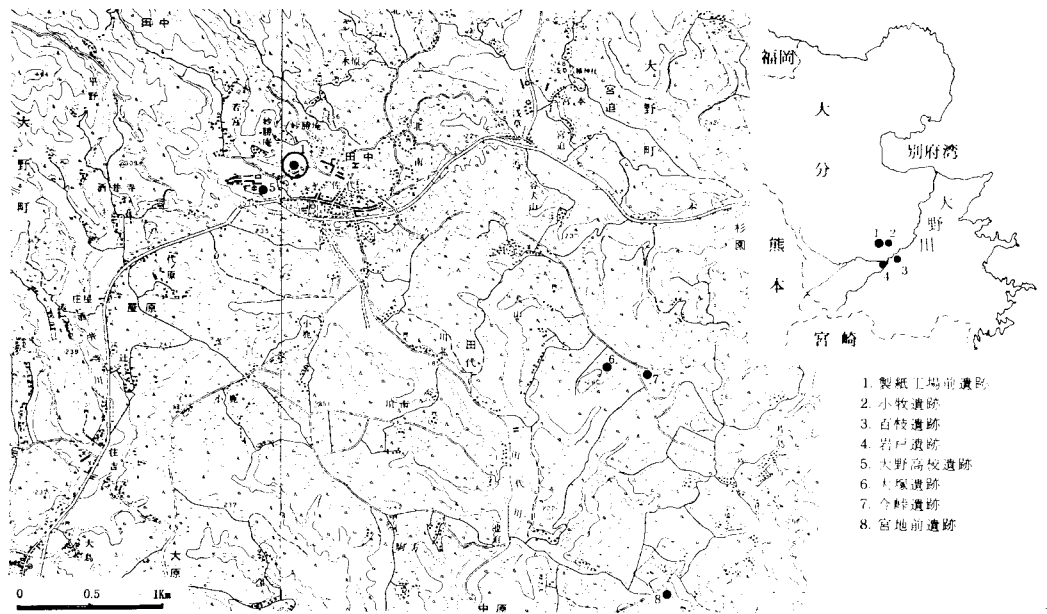
広がる広大な溶岩台地を浸食して、複雑な地形をつくりあげている。また流域の各所には河岸段丘が発達しており、旧石器時代の遺跡の多くはこの段丘上および開析が進んだ台地の平坦な箇所に見られる。

製紙工場前遺跡は大分県大野郡大野町大字田中字如勝庵に所在している。遺跡は鎧岳(標高890m)南麓に広がる舌状台地上に占地している。標高210~230mを測るが、南方に向けてゆるやかに傾斜している。西側は、大野川の小支流である深町川によって深く切り込まれており、この川を挟んで大野高校遺跡が対峙している。東側も小川が流れており、水田が営まれている。一方南側は200~300mの標高を有する広大な「大野原台地」へと続き、台地上には大塚遺跡、今峠遺跡、宮地前遺跡などの旧石器時代の遺跡が数多く点在している。

## 3 遺跡と土層の堆積

製紙工場前遺跡は、昭和42年頃から地元の大野高校郷土部などによって資料の採集が行なわれている。遺物の分布は、現在茶畑になっている箇所を中心として、ある限られた狭い範囲が予想されるため、遺物包含層確認のための試掘ピット(1×1m)は茶畑を中心に実施した。

第1ピットは茶畑の西側にあたる一段高くなっ



第1図 製紙工場前遺跡の位置と周辺の旧石器時代の遺跡

た畑地に、第2・第3ピットは茶畑に直接続く北側の地点、さらに東側の一段低くなった畑地に第4・第5ピットを各々設けた(第2図)。都合5個のピットを設定して試掘を実施したが耕作の関係で上面はかなり削平を受けており、茶畑西側の一段高くなった地点に設けた第1ピットにおいてのみ安定した層序の観察を行なうことができた。

第Ⅰ層 黒褐色のサラサラした耕作土層で、第1ピットで約25cmの厚さを有し、東側の谷へ向かって厚さを増し、第5ピットでは70cmを測る。

第Ⅱ層 黒色をした比較的しまった層で、第1ピットは約5cm、第5ピットでは約10cmの厚さをしている。

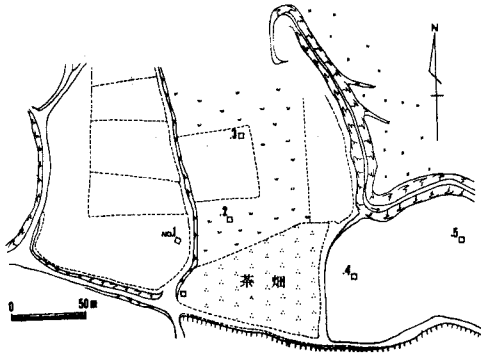
第Ⅲ層 黄色～橙色を呈しており、一般に「アカホヤ」あるいは「第1オレンジ」と呼称されている鬼界カルデラ起源の火山灰層で、第1ピット

で約10cm、第3ピットで20cm前後堆積している。

第Ⅳ層 黒色～漆黒色をしたやや固くしまった土層で、第1ピットで20cm余。第3・第5ピットでそれぞれ60～120cmと厚い堆積がみられる。

第Ⅴ層 茶褐色のローム質土層で、いわゆるソフトロームに対比されるものと考えられているもので、第2ピットをのぞく各ピットにおいてはほぼ20cm前後の厚さで堆積しており、第Ⅵ層との境界は不明瞭で漸移的に変化している。なお第1ピットにおいてこの層の上面から土器の細片とチャート片が、またⅥ層との境から流紋岩製の剥片がそれぞれ出土している。

第Ⅵa層 暗褐色を呈し、固くしまったローム質の土層で、いわゆるハードロームに相当し、そ



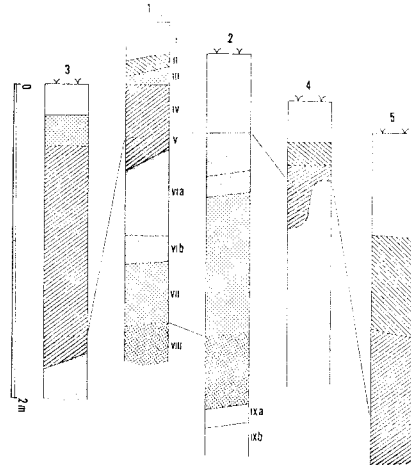
第2図 製紙工場前遺跡 試掘ピットの位置

の上・下面とも不整合な堆積をみる。第1ピットで約60cm、第4ピットで130cm以上の厚さを有している。当遺跡における旧石器時代の主要な遺物包含層と推定されるものであり、第1・第4ピットのⅥ層上部において数点の遺物が出土している。

第Ⅵb層 Ⅵa層に比較してやや全体的に明るいことから区別した層であり、土壌化が進んでいるが始良Tn火山灰層と考えられよう。第1・第2ピットで10～20cmの厚さがみられる。なお次の第Ⅶ層との境いは凹凸を呈している。

第Ⅶ層 茶褐色～暗褐色を呈するローム質の土層で、粘質が強く固くしまっている。第1ピットで40cm、第2ピットで90cmを測る。この層は色調においてはそれほど明瞭でないが、大野川流域で見られる暗色帯（黒色帯）に対比される土層と考えられる。

第Ⅷ層 Ⅶ層と同様な色調を呈しているが、土質は異なり、全体的に粒子が荒くザラザラしている。第1ピットではその上部を確認しただけであったが、第2ピットでは約50cmの厚さを測ることができた。

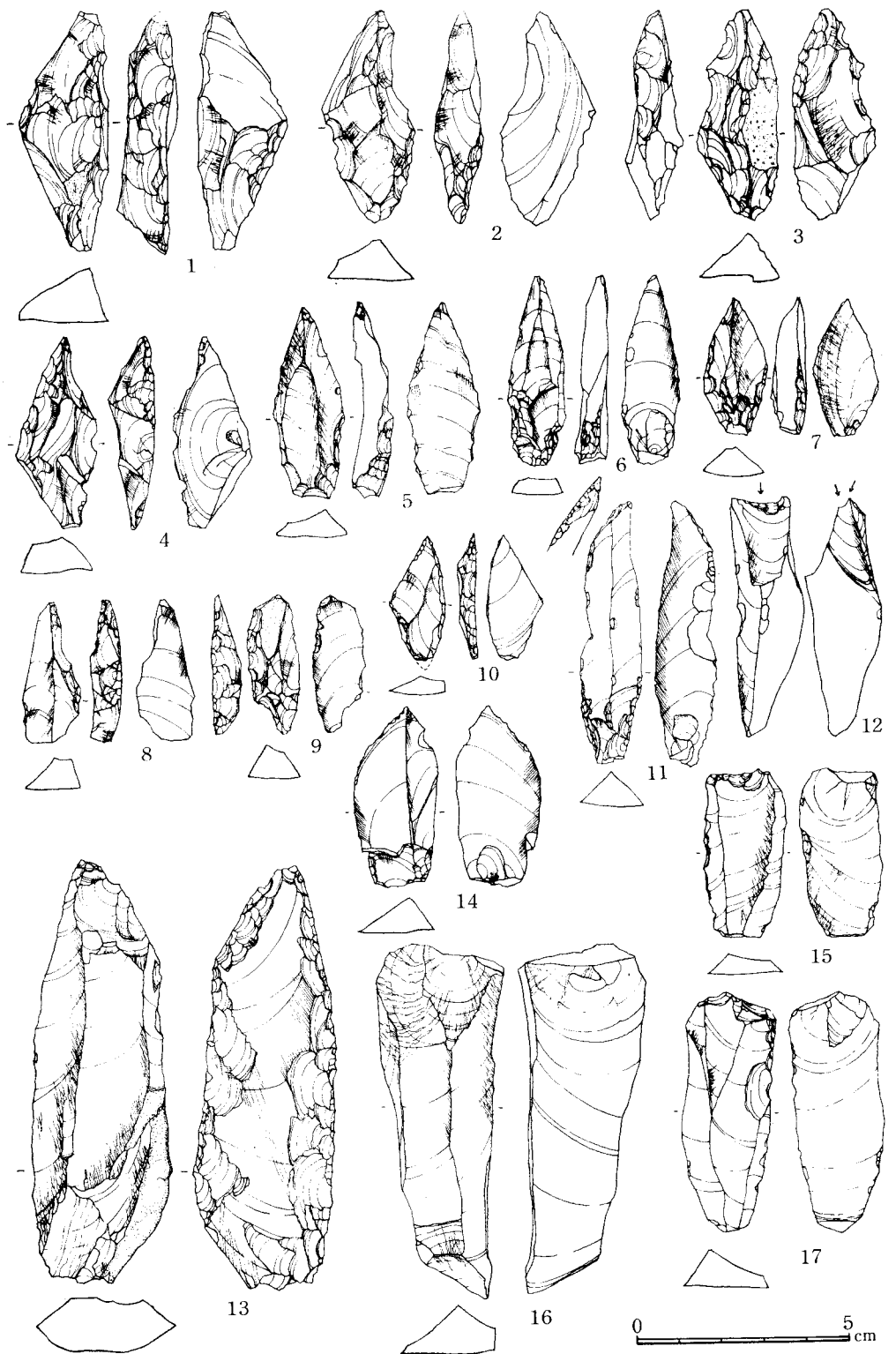


第3図 試掘ピットの土層堆積柱状図

第Ⅸa層 灰白色のブロック状を呈する降下軽石を含む火山灰層でⅨb層への漸移層である。第2ピットで約10cmの厚さがみられる。

第Ⅸb層 黄白色～黄灰色を呈する久住起源の降下軽石層で、一般に「マメンコ」と呼ばれているものであり、第2ピットにおいてその上部を確認することができた。

以上、製紙工場前遺跡の試掘ピットにおける地層の観察を行なったが、大野川中流域における堆積と基本的に符合するものと理解することができる。初期の目的であった当遺跡における文化層の確認については、出土した資料が極めて僅少でしかも表面採集で得ている様な定型化した石器が全く認められないこともあって、その目的を充分達成するまでにはいたらなかった。しかしながら、第1・第3ピットの観察による限り、製紙工場前遺跡における遺物包含層として、第Ⅴ層下面～第



第4図 製紙工場前遺跡および大野高校遺跡の採集資料

層の上部にかけて、すなわちハードローム上部を中心として一つの文化層が、具体的なデータで示唆されるのである。

#### 4 資 料

**採集資料** これらの資料は、大野高校在職中の鳥養孝好氏ならびに大野高校生徒によって、製紙工場前遺跡および隣接する大野高校グラウンドにおいて採集されたもので、大野高校郷土部において実見する機会を得た資料である。なお資料の大部分は速見考古4・5号に掲載されているため、ここではその補足という意味で、若干の未発表資料を加えてその概要を記すことに留めておきたい。

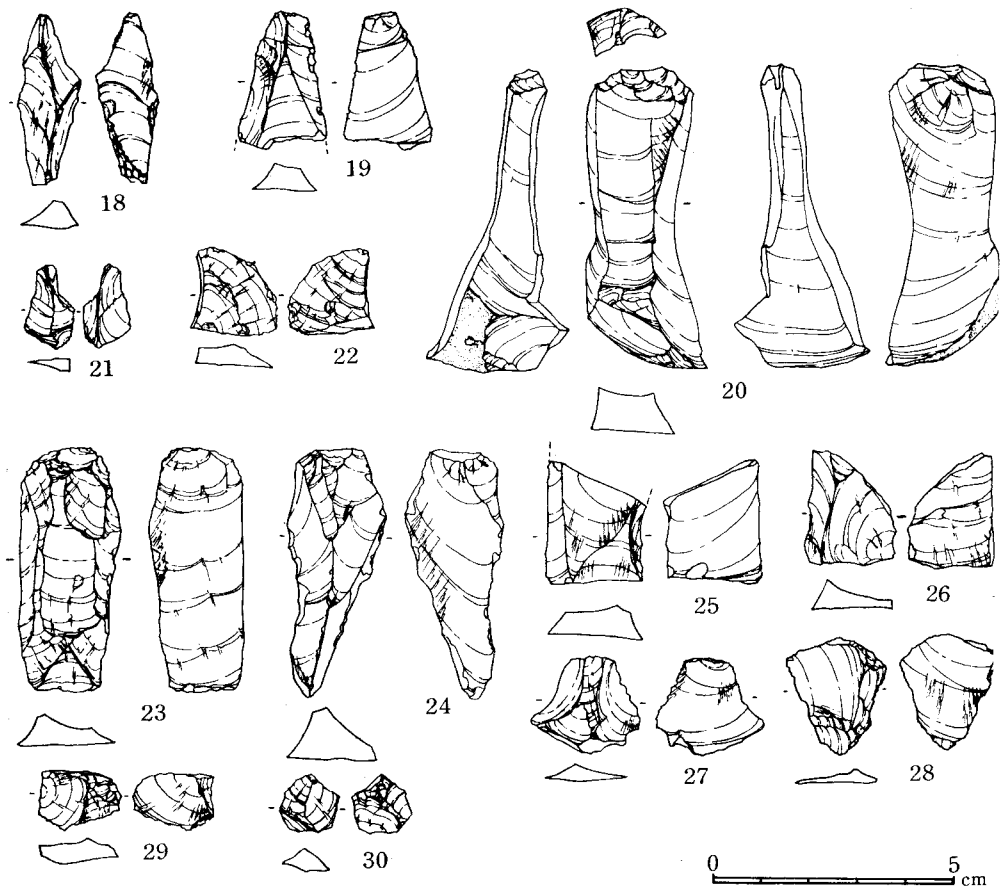
**ナイフ形石器(1~11)** 製紙工場前遺跡の石器組成中最も優勢な器種であり、素材および加工の部位からいくつかのタイプに分類することが可能と思われる。1~4は、比較的厚味のある横剥ぎの剥片を素材に用いて、背部と基部とにやや粗い調整を施したものである(第Ⅰ類)。1・2と比較して3・4は、刃部が想定される一側辺の状況や鋭い尖頭部を意図した加工などから、剥片尖頭器としての器種を予想させる要素がみられるがここでは一応ナイフ形石器として挙げておく。この4点の資料のうち4のみ大野高校グラウンド出土である。5~7・11は形の整った縦に長い剥片を素材にしてその打面側に集中的に加工を施して基部としたナイフ形石器である(第Ⅱ類)。ただ7についてのみは完成された石器の形態は他と同様であるが、素材は横剥ぎの剥片が使用されている。これら4点のナイフ形石器は、いずれも剥片の鋭いエッジを刃部および鋭い先端としてうまく

活用している。11は先端部を斜めにトリミングを行なって鋭くしており、これらのナイフ形石器の機能に切ると同時に刺すことを意図しているものと考えられる。8・9は縦に長い剥片を素材に用いている点では第Ⅱ類と共通するが、背部のブランディング加工が剥片の一側辺にほぼ限られ、残りの一側辺が刃部とされるものである(第Ⅲ類)。10は、素材とした縦長剥片を斜めに截断して背部と基部を形成しているほぼ三角形をした美しい小形のナイフ形石器である(第Ⅳ類)。

**彫器(12)** 不定形な剥片の一端に互いに直交する二面の彫刻刀面を有しており、二面が交わるエッジの部位にさらに小さな調整を施している。大野高校グラウンドでの採集資料である。

**尖頭器(13)** 大形の縦に長い剥片の主要剥離面にのみ、その側辺全体にわたって丹念な調整が施され、剥片の打面側に尖頭部を形成している。図示していないが、13と同様に比較的大形で縦長の剥片を素材にして、主要剥離面の局辺のみに加工を施した尖頭器が1点出土している。

**縦長剥片(14~17)** 第Ⅲ類~第Ⅳ類のナイフ形石器の素材が想定されるものである。14は、先端が尖り第Ⅲ類ナイフ形石器のように顕著なものでないが、打面側の両側辺に小さな剥離面が観察されるので石器としてみなすことも可能であろう。また、15・16の側辺の一部には使用痕とおぼしきものが観察される。なほ17の大剥離面には主要剥離面と逆な方向からの剥離面が認められ、これと同様な状況は、10の小形のナイフ形石器にも観察される。16は大野高校グラウンドの出土である。当遺跡出土の剥片は図示した形の整っ



第5図 製紙工場前遺跡の発掘調査資料

た縦長剥片の他、ややずんぐりした縦長で打面と逆の一端が片方によって「ノ」の字形のものもみられる。剥片の打面は平坦打面を基本としており、打角は $110^\circ$ 前後に集中する傾向がみられる。

製紙工場前遺跡および大野高校グラウンドで採集された石器類の石材は、濃淡の差はあるものいずれもグレーに近い色調をおびた緻密な石質である。大野川中流域出土の石器の大半を占めるものと同質であり、一般にはホルンフェルス、凝灰岩

質のスレート、あるいは無斑晶流紋岩と呼ばれているものである。

発掘資料 図示した13点の資料は、調査時において採集されたものと、本来の包含層と推定される地層から出土したものである。

18は、縦に長い剥片の基部側の主要剥離面にのみ調整が加えられた石器であるが、器種については不明といわざるを得ない。第1ピットの第Ⅶ層下面の出土である。19は、小さな平坦打面を残す縦長剥片で、打面と逆の一端を欠損している。

一側辺の打面より使用によるものと思える小さな刃こぼれが観察される。第Ⅶの層上部から出土している。20は比較的大形で厚味のある縦に長い剥片である。打面は二つの剥離面によって形成され、頭部調整がみられる。打面と逆の一端の大剥離面の一部に礫の表皮および石核調整剥離を残しており、剥片剥離作業の初期の行程での剥片と考えられる。第4ピットの第Ⅶの層上部から出土している。21は第1ピットの第Ⅴ層上部から出土した剥片であり、石材がチャートであることと、共伴した小さな土器片それに出土層位等から縄文時代早期の所産として大過ないであろう。22は第4ピットの第Ⅶa層上部から出土した不定形な剥片である。

23～30はいずれも調査時における表採および第Ⅰ層の表土層から出土した資料である。

23は当遺跡における典型的な、形の整った縦長剥片でナイフ形石器の素材として最適と思われる。24も縦に長い剥片であるが断面に厚味がある。25は縦長剥片で打面側を大きく欠損している。他はいずれも不定形な小形の剥片であり、26・29は他の普遍的な石材と異なり、黒耀石製である。

## 5 ま と め

①五ヶ所の試掘ピットにおいて旧石器時代の所産と考えられる遺物は二つのピットの第Ⅴ層および第Ⅶの層上部から僅か4点しか出土していないのであるが、当遺跡における旧石器時代の包含層はソフトローム下部～ハードローム上部にかけてが予想される。またそれ以外の層においては全く

認められないことから、採集されている石器類については第Ⅴ層下部～第Ⅶa層上部から遊離したものと考えられる。これまでに遺物が集中的に採集されている茶畑と同レベルで近接する第2ピットにおける層序がこの事を示唆しているものと思える。すなわち、第2ピットでは厚さ50cm前後の耕作土層がみられ、その直下の土層は第Ⅶa層となっており、しかもその上部にまで削平がおよんでいるのである。

②当遺跡における石器群組成の特徴としては、中心的な存在である第Ⅰ類～第Ⅳ類のナイフ形石器のバリエーションがあげられる。横剥ぎを素材にした全般に粗い調整を施した第Ⅰ類のナイフ形石器の中には素材に用いた剥片をうまく利用した尖頭器(剥片尖頭器)との関連を考慮しなければならないであろう。また大形剥片の主要剥離面側辺に沿って集中的な加工が施されている尖頭器は、石器組成中特異な存在として注目される。

石器組成中に、近接する大塚遺跡出土のいわゆる「九州型ナイフ形石器」や宮地前遺跡・小牧遺跡において出土している細石核・細石刃を全く含んでいないことは、当遺跡の編年的位置を考慮する際の重要なポイントとされる。

③製紙工場前遺跡と比較的近似する遺跡としては大野町の今峠遺跡、大野郡三重町の百枝遺跡Ⅲ・Ⅳ層、それに大野郡清川村の岩戸遺跡第1文化層が考えられるであろう。これらの三遺跡における石器群で基本的な共通するものとして、石器組成中にいわゆる「九州型ナイフ形石器」といわれる比較的大型のナイフ形石器がみられないことまた細石核・細石刃を伴っていないことである。さらに

これらの遺跡における石材としてスレート・無斑晶流紋岩・ホルンフェルスなどと呼称させるもので大半が占められていることも挙げられる。また層位的にはいずれの遺跡も黒色帯(暗色帯)、および始良Tn火山灰(AT)より上位の地層から遺物が発見されていることである。次に各々の遺跡の石器群と製紙工場前遺跡のそれとを簡単に対比してみる。

まず今峠遺跡については当遺跡で出土しているナイフ形石器と同様なものがみられ、また横剥ぎに近い剥片を利用したナイフ形石器とも尖頭器とも決定しがたい石器が出土している。一方、製紙工場前・百枝・岩戸の各遺跡において認められていない台形様石器が存在し、小形で幾何学形のナイフ形石器も含めて、細石器様相が看取されるようであり、石器組成から製紙工場前遺跡の石器群に若干後行すると考えられよう。この事は出土層位の観察とも符合するものと思える。すなわち今峠遺跡ではいわゆるソフトロームの中部から下部にかけて文化層が想定されるのに対して、製紙工場前遺跡は前述したようにソフトロームの下部からハードロームの上層に包含層が予想されるのである。

次に百枝遺跡についてであるが、本報告の発表がされていないため比較検討を行なえないのであるが、第Ⅲ層は「剥片尖頭器」、第Ⅳ層からは、「剥片尖頭器」と「ナイフ形石器」がそれぞれ出土している様であり、石器組成の面からすれば製紙工場前遺跡は第Ⅳ層のそれにより近似するものと予想されよう。

最後の岩戸遺跡第Ⅰ文化層についても報告を見

ないため詳細は不明である。ただこの遺跡の石器組成中片面加工の尖頭器、各種のナイフ形石器が存在しており、しかもナイフ形石器に横剥ぎの剥片を素材にしたものや、表裏の剥離方向が不一致なものなどみられないことなどに製紙工場前遺跡と共通した要素が指摘できそうである。

④以上のことを踏まえて、製紙工場前遺跡の时期的な位置づけについては百枝遺跡のⅣ層に最も近いものと考えておき、同遺跡のⅢ層、岩戸遺跡の第Ⅰ文化層、それに今峠遺跡などとも比較的近接する時期を予想するものである。

工場前遺跡の基礎調査にあたっては、竹田高校教諭の鳥養孝好氏にお世話になった。大野高校郷土部では採集資料を快よく拝見させていただいた。別府大学史学科の下村悟、富永直樹、中村和正、八尋実、福田一志、吉留秀敏の諸君達には終始協力をさせていただいた。記して心から感謝の意を表わしたい。

#### 【参考文献】

- 清水宗昭 「九州東北部における後期旧石器時代の様相」 大分県地方史 77 1975
- 芹沢長介 「大分県岩戸旧石器時代遺跡」 考古学ジャーナル 14 1967
- 芹沢長介 「大分県岩戸出土の“こけし形石製品”」 日本考古学・古代史論集 1974
- 橘昌信 「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(1)―今峠遺跡―」 別府大学博物館研究報告 2 1978
- 鳥養孝好・清水宗昭・橋爪啓史 「大野川流域における先土器時代資料」 速見考古 4 1973
- 鳥養孝好・清水宗昭・橋爪啓史 「大野川流域における先土器時代資料Ⅱ」 速見考古 5 1976
- 平口哲夫 「越中山区と岩戸Ⅰにみる國府系統の要素について」 東北考古学の諸問題 1977
- 町田洋 「大野川流域の古代人類遺物を包含する火山灰層」 クロボク 1978
- 吉留秀敏 「大野川流域における旧石器文化研究の現状」 クロボク 1978
- 渡辺誠編 「大分県大野郡宮地前遺跡発掘調査概報」 平安博物館 1978